

その中、サイクル県やまぐちProjectの関連企画を考える際に、《登頂ルート「クローズド&オープン」の提案》★をし、「毛利チャレンジ」や「やましろ羅漢スターリッジトレイル」は一定の成果を上げたものの、本丸と言える「山口ブルベ・スペシャルデイ」は持ち越しとなっています。その続きが「サークルナイン」であり、本来なら自転車市民権獲得を優先させるべきですが、自転車ソフトの実績作りを舵を切る判断をしたところで、「岩国市への提言・第二弾／山口県への報連相★」として、ジャンルを超えたより多くの関係者に呼び掛ける方法も考えました。

それがFig.6の「やましろフュージョンの提案★」で、ザッピング企画「かるたドライブ」と、サステナブル企画「サークルナイン」を融合したものです。地域資源再発掘用の地図作りを行う“合志会社・にしき川流域地図創造舎”を母体に、定期的な情報発信として“山代街道物見遊山外伝”を、人材交流の拠点として“羅漢高原トレイルパーク共同管理委員会”を想定していました。しかし、重点を置いていた環境団体の理解を得るには難があり、関係者に具体的な呼び掛けをする前につまずいたのも事実です。

そのつまずきのため Fig.6 の相関図にある「羅漢高原拠点化オールインワンの企画★」を断念し、「自転車ネットワーク再構築企画」と「地域資源再発見企画」に分けて、それを繋ぐ「MTBが地域を救う企画」を模索することになった次第です。尚、下記URLにそれらの経緯や「★印」へのリンクを掲載しています。

<http://www.bike-joy.com/ICD.htm>
岩国かるたドライブ・扉ページ



Fig.7(いわくに研究会3月定例会資料/助成金申請書含む)

§ 3. 理念:「春需でソフトを！」


Fig.7は、山口きらめき財団や岩国市の助成金への調整用ホームページ「杣道再生計画」の冒頭部分で、それを組み立てるに当たり、「やましろフュージョンの提案」で新たに提唱した、内容の補完と目的の攻守を表す『クローズド&オープン/レディ&プロモーション』は活かした上で、これまで同様、「点・線・面・広域から全国へ! (※注2)」を意識することや、「街道・山道・町の道」を網羅する組織的等身大運営の可能な“ツーリングコンペティション”を“日本の実情”に合った自転車ソフトの“軸”とすることは継続としています。

※注2/参考:
「やましろフュージョンの提案」からの転載

※注[* 点:トレイルメンテナンス&トレジャーポイント].....「にしき川流域創造舎」による観光メンテナンス
[~線:ツアーズ].....ツーリングは正に線、そして「やましろフュージョン」の軸としてのゲーム旅の推奨コース
[△面:ゲーム旅].....走る! 食べる! 学ぶ! 未知を点線面で遊ぶ「山代街道物見遊山外伝」は、やましろサザンセトエリアを想定
[◇広域:三方が海のこのエリアへ].....サイクリング特区にしき川流域は、河川争奪の現場を含む、拡大錦川流域を想定
[○全国:縄文が源流のこの国へ].....RM26系リアルサイクルエイドジャパンとして『日本の実情』に合った自転車文化を創造しよう! ?

“ツーリングコンペティション”は、旅と競技の要素を合わせ持つ【オープンロードで行うスポーツ】で、雄大な自然を相手にする「ラリーレイド」や、複合移動手段での「アドベンチャーレース」などが海外には存在します。しかし、日本にはその概念も無い状態です。その意味では曖昧なサイクリングの法的根拠が絶対に必要とは思いませんが、少なくとも「大人サイクリスト育成」のための「スーパー先達」は必要と思います。しかし、それには自転車市民権獲得が前提となってしまう、体質改善なのか? 対処療法なのか? のように、にわとりたまご的矛盾が生じます。

故に、「サイクル県やまぐちProject」も「自転車活用推進法」も、日本的サイクリングの枠内で対処療法的にしか展開できません。とは言え、彼らにも一定の責任が発生します。しかし、それを放棄している側面もあります。それは利用者の意識(スキル)を向上させることですが、ペーパーを配っただけでは、スピードや路面による自転車の挙動の違いは理解できません。尚、サイクル県や推進法については下記URLをご覧ください。

<http://bikejoy.web.fc2.com/JCP/THTjapanSUT.htm>  <http://www.bike-joy.com/k.htm>
「サイクル県やまぐちProject」を「サイクリストライセンス&ツーリズムメンテナンス」で五枚におおしてみた! 「自転車活用推進計画(案)」に関する意見

そして「理念」にある若干意味不明な「春需でソフトを！」は、ショップでのセールストークのキーワードで、各自転車関連団体の掲げる「自転車文化」には、自転車遊びの機会均等が根底にあると思われ、自転車と初めて出会う「春需」に合わせて、各地で『スキルアップスクール』等のソフトを提供できれば、自転車文化向上(市民権獲得)